

# 教育研究集会参加による学生の実践的学びと認識形成

—教育実践の交流と連携を軸とした教職における専門性の探究—

青木香保里・荒井眞一\*

## 1. 学生による認識形成をとらえるための課題と方法

年に一度、北海道においては全道各地の教員が札幌に集まり、合同教育研究集会が開催される。昨年度の学会報告において報告者は、北海道教育大学札幌校で担当する教職科目受講者58名をこの集会に参加させた際の実践報告・議論の経過と学生によるレポート記述をふまえ、研究集会参加の意義について述べた<sup>1)</sup>。

本報告では、昨年度報告時に集会参加の意義として述べた学生による認識形成の枠組みをもとに、複数の大学・学科の教職課程履修学生121名による認識形成のありようについての一般性を導き出すことをねらいとした報告を行う。

昨年度報告では、学生によるレポート記述から、学生の認識形成に関わって図1に示す3点が指摘された。

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 現代の教育現場のありように対する認識形成</li> <li>2. 学生としての現状に対する認識形成</li> <li>3. 講義内の報告会による認識形成</li> </ol> |
|---|

図1 学生の認識形成についての仮説

本報告では、図1に示した学生による認識形成についての仮説に従い、合同教育研究集会への参加を踏まえた学生の認識形成のありようについて、学生によるレポート記述を検討する。ただし、本報告が検討材料とする学生によるレポートの数は、前年度の2倍以上となった上に、複数の学科・学年にまたがるものとなっている。それゆえ本報告では、図1に示した仮説の検討に加えて、学生の認識形成において特徴的と思われる他の点についても、レポート記述を材料として可能な限りの検討を行う。

## 2. 教育大学講義における合同教育研究集会への参加と概要

### 2.1 合同教育研究集会の概要

2010年における合同教育研究集会の正式名称は「2010 合同教育研究全道集会」（以下、合同教研と記す）であり、この実行委員会を構成する加盟団体は、図2に示す42団体である。

上記集会は、2010年11月13日（土）、14日（日）、2日間にわたり、かでの2・7ホール（札幌市中央区北2条西7丁目）で開催され、延べ1324名が参加した。集会は、教育の夕べ、テーマ討論、特別講演、および分科会の3部により構成されている（図3参照）。

分科会は主たる交流の場となっている。分科会は教科の区分や教育問題に対応し24に分けられており、表1は2010年集会における分科会毎のレポート数を示している。研究集会の概要は、

\*北海道文教大学

『北海道の教育』という書籍として年度毎にまとめられ、出版されている。

全大教北海道 道私教組 道教組 道高教組 札幌保育労働組合 福祉保育労組北海道地本 建交労北海道本部  
建交労札幌学童保育支部 勤医労道本部 札幌市学童保育連絡協議会 新婦人北海道本部 共同映画社 道労  
働者学習協議会 自由法曹団 憲法会議 道平和委員会 キリスト者平和の会 子どもと教育・文化道民の会  
北海道子どもセンター 道民間教育団体連絡協議会 日本国民救援会北海道本部 北海道高等学校退職教職員の  
会 北海道新英語教育研究会 高校国語サークル AALA連帯委員会 日中友好協会 障道協 札幌郷土  
を掘る会 北海道合唱団 出版労連札幌地協 劇団さっぽろ 道労連 札幌地区労連 道医労連 高校センター  
教育研究所 全障研北海道 ウイルタ協会 札幌保育連絡会 トポス 全北海道退職教職員の会 少数民族懇  
談会 北海道フリースクール等ネットワーク

図2 2010 合同教育研究全道集会加盟団体実行委員会(合同教育研究全道集会実行委員会編『北海道の教育』p. 363)

1 日目・テーマ討論

1. 「子どもの実態から出発する授業・教育課程・学校づくり」
2. 『『生きづらさ』に寄り添う 一子ども・若者・大人がつながりあえる地域と社会をー』
3. 「他者からの“まなざし”をうけとめて ーアイヌ民族・在日コリアン そして戦争ー」

・分科会

・教育のタベ

1. 高校生の演劇
2. 開会集会：代表委員挨拶・基調提案
3. 記念講演：「地域から、子ども理解と学習観を深めあうおとなの新しい共同を」

田中 孝彦（武庫川女子大学）

2 日目・分科会

図3 2010 合同教育研究全道集会における開催内容（『北海道の教育』p. 364）

表1 2010 合同教育研究全道集会の分科会構成と参加者・レポート数（『北海道の教育』pp. 363-365）

分科会	レポート数	分科会	レポート数
第一 国語教育	9	第十三 教育課程と子どもの学力・評価	9
第二 外国語教育	4	第十四 学校と家庭の生活指導	11
第三 社会科教育	14	第十五 教育条件確立の運動	8
第四 数学教育	9	第十六 子ども、父母参加の学校づくり	7
第五 理科教育	9	第十七 地域における子育て・学習運動	7
第六 美術教育	9	第十八 地域と学校の文化・スポーツ活動	3
第七 書教育	6	第十九 国民のための大学づくり	6
第八 音楽教育	6	第二十 障害児・障害者の教育と福祉	20
第九 技術・職業教育	6	第二十一 環境・公害と教育	8
第十 家庭科教育	6	第二十二 平和・憲法、人権・民族と教育	9
第十一 保健・体育教育	10	第二十三 子ども・青年の発達と教育	9
第十二分科会 総合学習・生活科	7	第二十四 不登校・登校拒否・高校中退	6

## 2.2 講義における合同教研参加の位置づけ

2010年度に報告者が担当した、北海道教育大学札幌校における教職科目「教育課程と教育方法」および北海道文教大学における教職講義「教育課程概論」に合同教研への参加を位置づけるため、合同教研参加前の講義前半部においては、理論的な考察が可能な実践を学生に提示・解説した。取り上げた実践は、鹿児島県伊佐郡菱刈町立湯之尾小学校教諭・白尾裕志による「伊佐の稲作」である。

2008年度に白尾は、日本社会科教育学会（滋賀大学）のシンポジウムにおいて、自身のこれまでの実践を具体的に取り上げつつ、自身の問題意識と実践とのかかわりについて総括している<sup>2)</sup>。オリエンテーションに続く第2回講義では、このシンポジウムにおける白尾報告を足場として、授業づくりと問題意識との関わりについて述べた。続く第3回から第7回講義の場では、民間教育研究団体を基盤とした実践の歩みについて述べつつ、白尾より提供された資料の数々を駆使し実践を様々な角度から分析・考察した。

白尾実践を、“先行研究・実践”として位置づけた分析・考察によって得た知見を、合同教研において学生各自による分析・考察のための枠組みとしてもらうことを講義前半部の狙いとした。

平成22年度合同教育研究全道集会 国語教育 今再び「セメント樽の中の手紙」をⅡ	
<p><b>1、実践の概要</b></p> <p>この実践は現在北見支援学校に赴任されている河野晃先生によって、以前の赴任先である土別高校での指導方法と、更にその後気づいたこと、生徒からの感想などを付随して作られたものである。「セメント樽の中の手紙」という作品の教材としての取り扱いやすさやプロレタリア文学としての読み方、作品を「科学的に読む」ことの重要性などが挙げられている。</p>	<p><b>3、質問と解答</b></p> <p><b>質問</b></p> <p>教材としてプロレタリア文学を扱うことが少なくなっており、「セメント樽の中の手紙」も一つの教科書でしか扱われていないとのことですが、これはなぜでしょうか。学力低下により読み取りの力が弱まっているとの考え方はできますか。</p> <p><b>解答</b></p> <p>読み取りの力が弱まっているとは考えていません。これは、労働について考える話を少なくしている傾向があることによると思われます。過労死が話題になっている一方、フリーターやニートなど働く意欲のない人たちも増えています。物や情報があふれる現代で、仕事に生きがいを見つけるという考え方が弱まっていることから、このような傾向になりつつあるのだと思います。</p>
<p><b>2、実践の特徴</b></p> <p>今回の実践で取り上げられた「セメント樽の中の手紙」は葉山嘉樹によって1926年に書かれたものである。その頃の既存のプロレタリア文学が観念的、図式的であったのに対し、葉山の作品は、人間の自然な感情をのびのびと描き、芸術的完成度が高かったといわれている。「蟹工船」という作品が近年脚光を浴びていることや、就職氷河期とも言われている雇用状況の厳しさなどから、世間では再びプロレタリア文学が注目されているが、そんな風潮に反して、国語教育の教材からは消えつつある。現代にこそ必要と思われる「働く」ことの大切さ、その意義。それらを教えてくれる作品が教科書から消えていく今の流れに抗うべく、「セメント樽の中の手紙」を教材として取り上げた。</p> <p>この作品は、教科書にして6ページという全文の長さであること、朗読しても8分～9分程度と集中力を生徒が保ちやすい時間であることなどから、50分という短い授業時間の中でも非常に取り扱いやすい教材であるといえる。内容も「命」、「恋愛」、「労働」について触れられており、幅広い授業展開が期待できる。短い作品ではあるが、当時の生活と労働、そして命という人間が生きていくうえで基本的かつ重要なテーマを読むことができる。普段扱いにくいテーマであるからこそ、国語という教科を通して生徒の率直な意見を引き出し、改めて考えさせる機会を与えることが求められる。また、作品を「科学的に読む」ことでその文章が書き手の意図に添った表現であること、ほかの表現では置き換えることのできない唯一無二の表現であることを理解できる。表現は書き手によって選び抜き吟味された言葉の集合体であるから、それを味くするには作品の良し悪しやバランス、全体を通しての雰囲気などを捉えきれないのである。</p> <p>この実践では、上記のような作品の理解を前提とし、更に注目すべき点や生徒に読み取らせたい事柄などが書かれている。</p>	<p><b>4、感想</b></p> <p>多くの現役の先生方が集まるなか、実際に教壇に立ったことのない私たちに難しい議題もあったものの、今の現場の状況が開けるというはとてもためになったと思う。始めのうちは空気に馴染めなかったし、勉強不足でちんぷんかんぷんだったので、場違いだな、と思っていたけれど、先生方の話を聞いてうちにどんどんのめりこんでいって、最後のほうは話を聞くことに夢中になっていた。</p> <p>小中高共通の話題であった「言葉の乱れ」や、席替えの大変さ、爱国心教育にかかわる教材選びの難しさなど、座学では学べないことも教えていただいた。座学ももちろん大切ではあるけれど、教育は生徒がいて先生がいてこそ教育である。今後も教育について学んでいくことになる。教育実習などでは今回教えていただいたことが活かされると思うので、今回の内容を忘れず、しっかりと勉強を進めていきたい。</p>

図4 学生による国語教育分科会発表実践の報告

講義後半部7回では、学生2人を1組（原則）として、合同教研の場でみた実践1つに着目させ、1組15分の報告（発表10分、質疑5分）を、受講学生全員に行わせた<sup>3)</sup>。学生には、合同教研参加前に、分科会での質問を義務づけていた。それゆえ、報告においても分科会報告者（多くは学校教員）との質疑の内容を織り込むことを義務づけた。また、報告の聴衆となる学生に対しても、報告に対する質問を行うことを義務づけ、活発な質疑応答の達成を図った。

学生には、参加する分科会について一切条件は付けず、各学生の望む分科会に参加させた。図4は、学生による報告資料の一例である。

### 3. レポート記述にみる学生による認識形成

本章では、図1に示したレポート分析の枠組みに沿った記述と、参加学生数・学科数の増加に伴って明らかにされた特徴的な記述という2つの方向から、教育研究集会参加による学生の認識形成のありようについて検討を行う。

#### 3.1 認識形成の仮説との対応

昨年度報告の際に行ったレポート記述の検討から、学生の認識形成は3点に集約された。

##### ・第1点：現代の教育現場に対する認識形成

外国語教育分科会参加者による教育困難校における授業実践や、小学校における英語の実践といった昨年度報告は、現代の学校における問題を明らかなものにしていった。今回検討したレポート記述においても、以下のような記述で昨年度と同様の指摘がなされている（記述の後ろのカッコのうち、「教」は北海道教育大学の学生、「栄」は北海道文教大学人間科学部健康栄養学科の学生、「外」は北海道文教大学外国語学部の学生、末尾の数は学年を示す）。

- ・特に印象に残ったことは、過疎地域での小学校の外国語活動の授業についての報告だった。自分は今まで教員のよい面ばかりしか思いうかばなかったが、今回試行錯誤を繰り返しながら授業に取り組み、子供たちと向き合っているというお話を聞いていると、問題点や、自分の授業や子供たちとの向き合い方について考えさせられた。おそらく他の学生も感じたことだろう。（教2）
- ・私は今回の合同教研に参加して、先生方の様々な考え方や試行錯誤、児童・生徒との関わり方などを聞くことができたことで、教育現場ではどのように指導をするか考えているのかが少し見えたように思う。また、ベテランの先生も新任の先生も関係なく、正解がわからないまま実践をしていることがわかった。（教2）

上記と同様な学生の感想は、複数見られた。また、昨年度報告では、教科外の分野において、不登校・登校拒否・高校中退分科会の教育参加者による不登校児への対応に対する固定観念の打破といった事柄に、学生たちの新たな認識形成が確認された。今回検討したレポート記述におい

でも、以下のような記述で昨年度と同様の指摘がなされている。

- ・不登校や登校拒否の多くの理由は、対人関係やいじめだと勝手に決め付けていたが、内容を聞くと突然勉強が出来なくなったことから、別の進路を選んだ人や、ふとした日常が急遽ストレスになるなど、自分が思っている理由以外にも不登校や登校拒否の理由になりえることを知ることが出来た。身近に登校したくないという人がいない環境にいたため、相手のことを深く考えるといったことがなかったことから、この議題にはとても悩まされた。(栄2)
- ・今回私は、登校拒否・不登校の分科会に参加した。この分科会では、登校拒否や不登校・高校中退について、現状について報告があった。私が思っていたよりも、不登校は現在でも多く、深刻な問題であった。(栄3)

以上の他に、今回検討したレポート記述では、昨年度参加者のいなかった分科会に対する記述から、現代の教育現場に対する認識形成を示す、以下のようなものがみられた。

- ・今回、保健・体育の合同研究集会に参加し感じたことは、自分の考えが限定されていたことに気づいたことであった。特に、縦割り班の活動報告では、1年生から6年生の6人でひとつの班を作るといった班の作成方法には驚かされた。自分の所属していた小学校は生徒の数も多く、縦割り班を行うことの出来る条件は、少人数で全学年1クラスであることであり、そのような環境になかった自分は、班はクラス内で作るものであり、全学年で作るなど考えもしていなかった。(栄2)
- ・音楽教育の分科会に参加して、音楽の授業時間が減っているという現状を知った。そして、教職員はその限られた時間の中で、生徒が授業に興味を持つ事ができるように、毎時間の授業内容について工夫をしている事がわかった。(栄2)

## ・第2点：学生としての現状に対する認識形成

昨年度報告では、意見をうまく言えない自身に苛立ち、レベルの高い議論に戸惑いながらも、教育実践者や研究者と有益な意見交換を行った学生たちの様子を、レポート記述から明らかにした。今回検討したレポート記述においても、以下のような記述で昨年度と同様の指摘がなされている。

- ・今回合同教育研究集会に参加して、実感したのは勉強不足であるということと考え方の甘さなど。勉強不足だと感じたのは、まったく話についていけなかったことが大きい。もちろん相手は、教師としての実績があつて教材研究や実践での経験も豊富な方々ばかりではあつたが、それにしてもという感じだった。だが、そのことに気づけたことは、この集会に参加した意義があつたといえると思う。(外2)

- ・分科会別に分かれて、発表を聞いたあとの質問で、積極的に発言している他学生や、それに答える発表者を見ると、自分よりも教育について考えていることが伺えた。(栄2)

ただし、今回検討したレポート記述には昨年度と若干異なる傾向がみられた。その傾向とは、以下の記述にみられるような、現状をふまえた上での前向きな内容を示す記述である。

- ・ほとんどの人が教育に対しては勉強不足であって、この合同研究についていけなかったみたいだけど、この集会に参加したことで、改めて自分の無知さを考えさせられることができるいい機会であったと思います。自分が教壇に立つには、まだ早くももっともこれから先生になる上で、しっかりとした自分の考えや常識、専門的な知識、生徒のことを理解する能力が足りないことを感じました。(外2)
- ・大人たちとの討議に自分も参加できるので、自分の考えを討議の場でいかに発言できるかがポイントになってくる。私は自分のレベルが低いのではないかと思いなかなか多くの発言はできなかったが、それでも質問や発言をしようとすることに意義があると思う。(外3)
- ・現場経験の無い私たち学生ではあるが、経験が無いからこそ持っている視点もあるはずである。もしかすると現場で活躍する教師にとって、私たち学生がもつ視点は、時として非常に斬新で、自分の教育観に大きな刺激を与えるということも十分にありうるのではないだろうか。したがって、教育研究集会においての私たち学生は、謙虚に話を聞き、それを受け入れる姿勢は持ちながらも、「経験が無いから」といって引き下がりすぎではなく、貪欲に自分なりの意見、見解も伝えていくという姿勢がふさわしいであろう。その中で、自分の間違いに気づいた時にそれを修正し、これから先の確固たる自分の教育観の形成のために役立てれば良いのである。(教2)

推測ではあるが、上のような記述がみられた理由の1つは報告者の指導にあるように思われる。昨年度の検討で報告者は、学生による現状認識が彼らにマイナスに働いてはならないという意識を持つに至った。そのため上記感想と同様な発言を集会参加前の学生たちに行っていたのである。

### ・第3点：講義内報告会による認識形成

昨年度報告では、他の学生による報告を聞き意見交換を行うことによって、学生たちはより多くの情報を得つつ、実践に対する受けとめ方の多様さを知る学生の様を明らかにした。これら質疑応答は、学生による理解の深まりを促すものとなった。今回検討したレポート記述においても、以下のような記述で、より多くの情報を得つつ実践の受けとめ方の多様さについて学びながら、充実した議論を行った学生の様が明らかとなっている。

- ・合同教育報告会では、自分が見に行った分科会以外の分科会におけるレポートの報告がされ、レジュメやパワーポイントも的を絞ってわかりやすく作られたものが多かったため、合同教研の時に、自分がその発表を聞きにいないにも関わらず、その発表の流れを知ることができた。(教2)
- ・同じ分科会に参加しているグループもいくつかあったが、発表者によって捉え方やプリントとして配られた中の感想も違い、読む方としては二つの捉え方、感想を読み自分ならば…と考えることでその内容をより理解することができる。(教2)
- ・私は、今回の講義内報告会でぼろぼろに打ちのめされてしまった。それは、自分自身の考え方やまとめ方の甘さが招いたことだ。ただ、今回の報告会で打ちのめされたことは私にとってはよかったのかもしれない。こうやって、今の自分自身がまだまだ甘いということに気づけたのだから。この講義内報告会の意義として思うことは、単純にそれぞれが聞いてきた報告会の意味以上に、自分が何を聞いてそれを自分なりにどう解釈したのか。そして発表した上で周りの人からの意見をもらい、どう自分の考えなどに肉付けしていくか。そういった意味合いがとても大きいと思った。(外2)

以上、図1に示した3点を枠組みとした検討では、昨年度報告と同様な記述がみられた上に、記述の増加に伴ってより詳細な形でとらえられている。

### 3.2 今年度の検討から特徴的に把握できる学生の認識形成

今回検討したレポート記述には、昨年度の検討ではごく少数しかみられなかった2種の記述が、全体の1割以上の学生から共通してみられた。以下、それぞれの記述ごとにまとめる。

#### ・第1点：教員等の他者との交流

分科会当日には、どこからともなく「今年は学生が多いねえ。」という声が幾度となく聞かれた。学生たちが現職教員と何らかの交流を図ったであろうことは、分科会会場で察せられたが、学生たちの以下の記述からも明らかとなる。

- ・学生が意見を言いやすいように場の雰囲気を使い使ってくれたことがとてもありがたかった。自分は授業の一環として参加したが、研究報告を聞いているうちに自分が疑問に思っていることを質問することができたし、自分の質問に対し先生方が一緒に考えてくださったことに、驚いた。(外2)
- ・個人的には、分科会の後に前年から期限付きとして高校で教員として働いている先生とお話する機会を得ることができ実際の仕事の様子を一部分であるが聞かせていただいた。お話の中で生徒とのやりとりや、部活指導、進路指導の大変さ、休みがなかなか取れないことなど、教員という仕事の楽しさ、大変さを垣間見ることができたのも大きな成果だっ

た。(外3)

- ・今回の合同教育研究会に参加されていた先生の中で、漢字についてレポートを書いていた先生がいた。その先生にレポートを送っていただいたこともとてもためになった。(外2)
- ・教員の方が今実際に行っていることを多く語られていたので、そういった現場の方の話というのはとても興味深くそしてためになった。他にも、文教大学以外の学生さんも来られていたので、学生という一番身近な意見も聞くことができよかった。(栄2)

上記学生の記述からは、教職課程履修学生を仲間としてとらえ、より多くのことを伝えようという教員たちの熱意が感じられる。学生たちもまた、それらの熱意を受けとめ、参加時間内で可能な限りの認識形成を図っていたことがうかがわれる。

## ・第2点：研究集会に対する意識の変化

研究集会への参加について、学生たちには授業の開始時に、履修の要件として告知している。いきなり研究集会への参加を義務づけられた学生が「面倒くさい」と思うのは当然だろう。しかしほとんどの学生は、報告会や報告者との個人的な話の中で「参加して良かった」と口にする。昨年度報告の講義時においても上のような傾向はみられたが、本報告では学生によるレポートとして、以下のような記述が複数みられた。

- ・今回合同教研に参加するにあたって、行く前は面倒くさいと思っていた。しかし行って話しを聞くと、もっと知りたいという気持ちになった。冬休みに個人的に現職の教員の勉強会に行ってきた。これからも、いろいろな研究会や勉強会に参加したいと思う。合同教研はそう思うきっかけとなった。(教2)
- ・合同教研に参加する前は「難しそう」「つまらなさそう」というイメージだったが、いざ参加してみると、雰囲気は和やかな感じで、自分たちが受けたことのない授業の実践報告や教科書に載っていない先生の持ち込み教材についてなど、どれも興味深い発表ばかりだった。(教2)
- ・将来教員を目指す、そうでなくても教員免許を取得するという立場の者にとってみたら、やはり大学の教室で教授の話を聞いているだけでは学べない実際の現場というものがあると私は考える。そのために実習があるのだと思うのだが、その予行のための知識や教師としての心構えなどをこの合同教研で学んだり、感じ取ったりすることもできたと思う。(教2)

上記と同様な記述はその多くが教育大の学生によるものであった点が特徴的である。

以上、本節3.2における上記2点に関する記述から、学生たちが各分科会において、教員たち



と良い人間関係を築き得たことが察せられる。各分科会における議論の様態を詳細に記した『北海道の教育』においても、次のような形で教員と学生との関係構築がなされたことが記されている。

今年の合同教研では、多くの大学生が国語分科会にも参加され、活発な議論ができた。(中略)、親(社会人大学生)からは、娘の国語教育について「書かない作文」「読まない物語授業」に不安を感じていると報告された<sup>4)</sup>。

上記「親(社会人大学生)」は特定が可能である。この学生は「教職をこころぎず一学生として聴講だけのつもりで参加したが、友好的な雰囲気につられてついつい真剣に討議に参加してしまった。プロの経験ある教師にあれこれ意見を述べるのは礼を逸していたかもしれないと反省している。(外3)」とのレポート記述を行っている。この記述からも「活発な議論ができた」ことがうかがわれる。

また、昨年度・今年度における検討会の双方で学生の報告数が多く、本節3.1で述べたように学生の固定観念を打破する契機となっていた不登校・登校拒否・高校中退分科会に関して、『北海道の教育』では以下のような記述がなされていた。

子どもの成長に沿った現場での実践交流ができた事は大きな財産を得たといえる。また、教職を目指す大学生の参加や発言に心の目を見開かされたことも大きな収穫といえる<sup>5)</sup>。

上記「大学生の参加や発言に心の目を見開かされた」との記述は、学生の固定観念の打破という記述と表裏一体ではないか。また、健康栄養学科学生の参加の多かった家庭科教育分科会について、『北海道の教育』では以下の記述によって学生参加の意義がまとめられている。

本年度の分科会では、北海道教育大学の学生4名、北海道文教大学の学生10名を含む25名の参加者を得た。大学生から発せられる教育実践や教育現場に対する疑問や質問が分科会における活発な討議と交流を促進した。学生の参加を得たことが、討議の深まりと広がりを支えたといえる<sup>6)</sup>。

#### 4. 実践の成果と今後の課題

以上、本報告では合同教育研究集会に参加した学生による認識形成に関して、昨年度の検討を踏まえた枠組みをもとに検討を行った。今年度の検討では、この枠組みに従った形で学生による認識形成をとらえることが可能となった。ただし、今年度検討分においては、対象学生の数が2倍になったことで教員たちとの交流が促され、昨年度の枠組みをはみ出したかのような記述がい

くつか見られることとなった。それゆえ、従来の枠組みは踏襲されるべきと思われる一方で、さらなる検討の必要性も生じたといえる。

報告者が研究集会参加を学生に課した講義について学生による以下の記述を取り上げたい。

- ・講義の前半で、実践に対する報告を何時間もかけて内容把握、まとめをおこなった。それを小グループ学習で私たち自身が1から行い、発表したのが今回の報告会であった。なので、講義の前半で行ってきたもののまとめという役割があると私は考える。(教2)

上に書かれた内容は、報告者が講義のねらいとしていたことと一致する。この学生のみに関して述べるなら講義の目標は達成されているといえるが、一方で、このような記述を行った学生は2名にすぎない。講義のねらいとするところが学生に対し明白となるような内容構成が、短期的な課題として求められる。

最後に、健康栄養学科の学生に焦点を絞り、長期的な課題を述べたい。他の学科に比べ健康栄養学科学生のレポートには、以下のように、自身の専攻と関わらせた記述例が多くみられた<sup>7)</sup>。

- ・栄養教諭の立場ではまず、食に関することが主体となるが、子ども達と関わりの場を作り、心身の成長をサポートする行動をしていかなければならないと考えた。このように各分科会での様々な情報が考えるきっかけとなる。(栄2)

健康栄養学科の学生の多くは家庭科教育分科会に参加し、そこで分科会に参加していた教員たちと良い関係を作っていた。しかし一方で、以下のような学生の要望もみられた。

- ・今回の合同教研には、栄養教諭に関連したブースがなかったので、もし次回開催するのであればそのようなブースも設けられていたらよいのではないかと感じた。(栄2)
- ・栄養教諭はまだ歴史が浅いが、今後合同教育研究集会で給食や栄養に関わる分科会が加わり、学校給食の課題など共に考える場ができればよいと考える。(栄3)

栄養教諭の専門性の高さという点を考慮するならば、分科会のような形で専門的な議論を行った成果を踏まえつつ、家庭科教育分科会のような場から教科との連携の方向性を探ることが、栄養教諭を目指すものにとっては望ましい形だろう。このような状況を達成するための働きかけが、実践上の長期的な課題となる。

## 付記

本研究の一部は、日本教師教育学会第21回研究大会（2011年9月17日・18日。福井大学）において報告した。また、本研究は、平成23年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究課題「家庭科教諭・栄養教諭・養護教諭の連携を目指した授業プログラムの開発」（課題番号 23501105）の助成を受けて行った。

## 引用文献

- 1) 昨年度報告の詳細は、荒井眞一・青木香保里「教育研究集会参加による実践的学びの実現を目指した教員養成系大学における授業実践」（『愛知教育大学研究報告第60輯』2011、pp. 81-90）にまとめられている。
- 2) 白尾裕志「社会科実践と子どもの社会認識 -『話し合う』ことと『書く』ことで深める社会認識-」（日本社会科教育学会編『社会科教育研究』No. 107 2009、p. 45）
- 3) 合同教研不参加の学生は全体で1名だった。この学生に対しては、報告者筆による教育論文を提示し、その意義や問題点について（初回報告会の第1番発表者として）報告を求めた。また、合同教研に関する報告と同じく、論文執筆者への質問を報告の要件とした。
- 4) 荒木美智雄「『かしこく・ゆたかに・たくましく』本質的問いを『国語教育』の中心課題に据えて」（北海道合同教研事務局編『北海道の教育〔2011年度版〕』p. 115）
- 5) 福田好孝・十河幸喜「伝承と発展そしてヒューマニティー、それが美術」（『北海道の教育〔2011年度版〕』p. 177）
- 6) 青木香保里「子どもの今を共有し、現実を探究する家庭科」（『北海道の教育〔2011年度版〕』p. 206）
- 7) 専攻に関わった記述は、健康栄養学科の学生が4割ほどだったのに対して他の学科は1割程度であった。